

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(37) 平成13年12月15日

藩校・寺子屋で使用された教科書(その2)

## 藩校と教科書・『貞観政要』(K325/10)

政治の教科書として、藩校等で広く使われたものに『貞観政要』(K325/10)があります。『貞観政要』は中国唐の時代、太宗と臣下の問答や君臣の事跡を、史家である呉兢が太宗の没後50年を経て10巻40篇に分類・編纂した書で、為政者の参考とされた書です。

太宗(李世民)(598~649、在位626~649)は、隋末の群雄割拠の混乱を重ねていた中国を統一して、唐朝300年の基礎を築いた、中国史上傑出した政治家でした。貞観とは、その太宗の在位していた年号であり、太宗の治世を「貞観の治」と呼び、理想的な道德政治の世と賛美されています。

『貞観政要』は、唐代の10世紀末に日本に伝来しており、源頼朝の妻・政子が藤原為長に命じて和訳させた『仮名貞観政要』は、政子の愛読書でした。北条氏も代々『貞観政要』を重んじており、また徳川家康も『貞観政要』を愛好し、文禄2(1593)年には藤原惺窩を召して講義させ、更には慶長5(1600)年、足利学校の座主・閑室元信に命じて、活字本『貞観政要』を開版させています。いわゆる「伏見版」と呼ばれる木活字版です。家康は政治・軍事のみならず文教政策にも優れ、学問の重要性を認識しており、この後林羅山と金地院崇伝に命じ、太宗の名臣魏徴の著『群書治要』(元和2(1616)年)などを銅版活字「駿河版」を使用して印刷、刊行させました。

「貞観の初め、太宗、侍臣に謂ひて曰く、君たるの道は、必ず須らく先づ百姓を存すべし」(貞観の初年に、太宗が侍臣たちに語って言われた、「君主としての道は、必ず是非とも、人民たちを憐れみ、恩恵を施さなければならない。」第1巻、「君道」第1)と書かれているように、『貞観政要』は単なる政治上の理論を述べたものでなく、政治の実践記録とも言うべきもので、太宗の言行が具体的に記述されているため、後世の為政者にとって実際の政治を行う上で優れた教科書参考書となりました。

当館所蔵の『貞観政要』(K083/166・K325/10)は和刻本(中国などの書を日本で覆刻した本。和版本)10冊で、文政6(1823)年に紀州藩の伊藤弘朝が校刻したものです。当館所蔵の巻末刊記には、「文政六年癸未正月 南紀學習館蔵版之記」とあります。本文は伏見版を底本としており、本文・註釈には訓点が施されています。前述の伏見版、小田原藩時習館校正本など、4種ある刻本のうちのひとつです。治者としての教養を修める藩校教育において重要な教科書であったため、全国に普及した『貞観政要』ですが、諸藩校の蔵書の中でも、この紀州藩学習館版が多く存在し『貞観政要』の中でも最も広く流布し使われたものです。

この併交で使われた教科書の中で日本の書物として、『六国史』と『日本外史』が掲げられます。『六国史』は、日本古代、律令国家によって編纂された正史である『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『日本文徳天皇実録』『日本三代実録』を指し、神代から光孝天皇の仁和3(887)年に至ります。歴代天皇の実録としての性格も持っており、読み物として広く利用されました。当館所蔵は『六国史皇統記』(小国重年著、天保4(1833)年刊)(288/54)があります。

また頼山陽著の『日本外史』(K083/33,34)は司馬遷の『史記』を手本にした、源平二氏から徳川氏に至る武家の総合的な漢文体の日本歴史書で、天保7(1836)年頃刊行されました。漢文の素養が必要なくなるにつれ、使われなくなりましたが、歴史上の登場人物の会話を無理に典雅な漢文体に翻訳しないなど、その叙述の巧妙さなどから、幕末を経て明治初年に至るまで、広く使われました。

### 【参考資料】

- 『貞観政要』新釈漢文大系 95(928/103)
- 『貞観政要の研究』吉川弘文館(222.04/101)
- 『近世藩校に於ける出版書の研究』(023.1/115)